

ハウス雨よけ栽培におけるカラーピーマンの生産特性

齋 藤 謙 二・石 山 秀 峰*・川 村 啓 造**

(山形県立園芸試験場・*寒河江農業改良普及センター・**山形県庁)

Productive Character of Color Sweet Pepper Under Green House

Kenji SAITO, Hidetaka ISHIYAMA* and Keizo KAWAMURA**

(Yamagata Prefectural Horticultural Experiment Station・*Sagae Agricultural Extension Service Center・**Yamagata Prefectural Government Office)

1 は じ め に

カラーピーマンは近年の食生活の多様化とともに、需用が高まっており、栽培事例が増加している。これまで、しり腐れ果の回避技術及び、緩効性肥料を利用した施肥法について報告した。しかし、収量の大半が収穫初期に集中することから、収穫作業の分散化、また収穫後半の収量減等の問題点が残った。そこで今回は、側枝の整枝法と主枝の着果の制限が生産特性に及ぼす効果について報告する。

2 試 験 方 法

試験1 間引き整枝法 (1998年)

- (1) 供試品種：彩レッド
- (2) 試験区の構成

間引き法

上位節の間引き方法	
時 期	側枝の処理
分枝5節葉展開ごと	すべて2節切り戻し
〃	半数2節切り戻し
分枝3節葉展開ごと	すべて2節切り戻し
〃	半数2節切り戻し
随時	半数2節切り戻し

(3) 整枝方法

播種 1月17日 定植 4月1日
栽植距離 うね幅150cm 株間50cm 1条植え
栽培方法

主枝4本仕立て。主枝の誘引方法はフラワーネッ

ト水平張りによる誘引とし、2節摘心区は紐誘引をあわせて実施した。主枝の摘花は第4節まで実施した。切り戻しは10月29日に草丈150cmで行った。

(4) 施肥量 (kg/a)

N : 1.5 P₂O₅ : 1.5 K₂O : 1.5
苦土石灰15 堆肥200

試験2 摘花処理 (1999年)

- (1) 供試品種 彩レッド
- (2) 試験区の構成

摘花処理

主枝の着果制限
主枝12節まで全て摘花
主枝12節まで主枝第4節以降1節おき摘花
主枝2本を主枝第5着果節まで摘花
主枝1本を主枝第8着果節まで摘花
無処理

(3) 栽培概要

播種 1月18日 定植 3月30日
栽植距離 うね幅240cm 株間50cm 1条植え
整枝方法

主枝4本仕立て、紐誘引。摘花処理は、第2節まで摘花後、試験区により摘花した。

3 試験結果及び考察

〈試験1〉 間引き整枝法

表1に間引き整枝法の収量を示した。商品果収量は、主

表1 間引き整枝法における等階級別収量

株当たり

品 種	試 験 区	A果 ¹⁾ (個)	B果 ²⁾ (個)	総収量		商品果収量			
				個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	1果重 (g)	a当たり (kg/a)
彩レッド	5節葉全て2節切り戻し	20.2	31.2	83.2	8,552	51.4	6,156	119.8	684.0
	5節葉半数2節切り戻し	24.0	28.8	86.4	8,801	51.4	6,179	120.2	686.5
	3節葉全て2節切り戻し	19.8	26.6	83.6	8,311	46.4	5,510	118.8	612.2
	3節葉半数切り戻し	24.4	25.8	87.8	8,769	50.2	6,073	121.0	674.8
	全て2節切り戻し	24.3	23.3	79.0	8,507	47.5	5,883	123.9	653.7

注. 1) A果：1果重が100g以上であり、果形がベル型で整っている果実

2) B果：1果重が70g以上であり、果形がベル型または、軽度変形の果実

枝5節葉展開全て2節切戻区、主枝5節葉展開半数切戻区、主枝3節葉展開半数切戻区の3試験区でa当たり約680kg、同区で株当たりのA果・B果の商品果数は約50個であった。

時期別商品果数量は図1に示した。いずれの間引き整枝区とも7月下旬に収穫ピークを向かえ、8月以降は落花が多く、商品果数量が少なかった。生育後期の商品果数量が減少する要因としては、生育初期に着果した果実が肥大することにより、草勢の低下が起こったものと推察された。

このため、生育初期に適正な着果数に制限し、草勢を維持することにより、生育後期に安定した収量を得ることが出来るのではないかと考えられた。また、間引き整枝法は、省力的かつ栽植本数も多い反面、過繁茂になりやすいため、落花が多く、屑果の発生、果実が着色遅延する傾向が認められた。

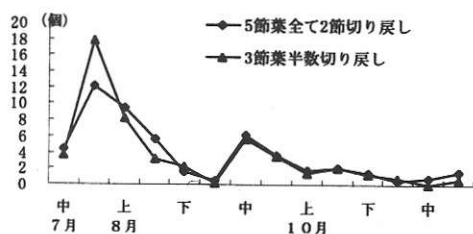


図1 間引き整枝法における時期別商品果収量

時期別商品果数量は、図2に示した。7月下旬に収量が増加し、9月中旬、10月上中旬に再び収量が増大した。これは、低節位の花を摘花したことにより、草勢が維持されたことによるものと考えられた。収穫果の大きさは、試験区間の差はみられず、収穫初期に大きく、中期以降はやや小さくなる傾向が認められた。糖度は、各区とも収穫期間を通して、7.0 (Brix %) 前後で安定して推移した。

以上のことから、摘花処理は、草勢の維持に効果的な方法であり、これにより収穫期の分散が図られ、長期収穫が可能になると考えられた。また、主枝の摘花を実施した場合においても、低節位の側枝の着果数増加することにより、樹勢の低下が認められた。

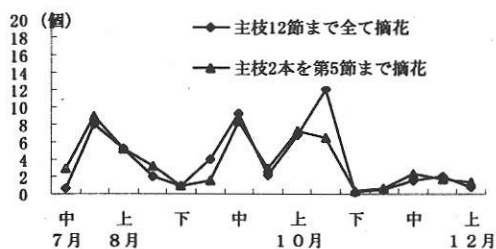


図2 摘花処理における時期別商品果収量

〈試験2〉 摘花処理

摘花処理試験の収量を表2に示した。a当たり商品果収量は主枝着果を制限した主枝第12節全摘花区では605kgで最も多く、次に主枝2本着果第5節摘花区が、549kgであった。間引き整枝法に比較し、栽植密度が低いため、面積当たり収量はやや減少したが、果実の着色が良好であり、果形の乱れ、屑果の発生は少ない傾向があった。

表2 摘花処理における等階級別収量

品 種	区	A果 ¹⁾ (個)	B果 ²⁾ (個)	総収量		商品果収量			
				個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	1果重 (g)	a当たり (kg/a)
彩レッド	主枝12節まで全て摘花	39.8	19.2	62.8	7,548	59.0	7,259	123.0	605.0
	主枝4本を第4節以降1節おき摘花	35.9	10.0	51.4	5,604	45.9	5,130	111.8	427.5
	主枝2本を第5節まで摘花	43.4	11.6	58.5	6,843	55.0	6,592	119.9	549.3
	主枝1本を第8節まで摘花	41.1	12.6	57.9	6,808	53.7	6,449	120.1	537.4
	無処理	40.0	16.6	62.3	6,697	56.6	6,294	111.3	524.5

注. 1) A果: 1果重が100g以上であり、果形がベル型で整っている果実

2) B果: 1果重が70g以上であり、果形がベル型または、軽度変形の果実

4 ま と め

雨よけ栽培におけるカラーピーマンの生産特性として、生育初期の過度な着果により、草勢の著しい低下が認められ、長期どり栽培は困難であった。本試験によって、草勢の維持には、生育初期の摘花が効果的であり、生育後期まで安定した、収量が得られることが確認された。